

これまで説明してきた「こどもの居場所づくり」報告書には、①こども・若者のwell-beingの実現のためには居場所が必要だ②居場所は多様だが、すべてのこども・若者に等しく開かれた居場所と、取り残されがちなこども・若者を包み込む居場所の2種類がある③当事者の視点に立った居場所運営が重要——という3つの観点が盛り込まれている。今回は③を詳しく述べる。

不可能性と可能性

報告書では、こども・若者の居場所づくりで大切な視点を「いちばん大事にしたいことは、あなたがそこに居たいと感じるか」だと規定し、居場所の質（魅力）を「居たい、行きたい、やってみよう」という要素ごとに集約した。あなたがそこに居たいと感じるかが重要というのは当然のようにも思われるが、これは居場所づくりの不可能性と可能性に対する言及だ。どういうことか。

あなたにとって居場所はどこかと問われたら、どこを思い浮かべるだろうか。家庭のリビングや個室（「ガレージの車の中」と答えた人もいた）、学校や職場、子どもならゲーム屋や駄菓子屋、大人なら居酒屋やスナック、趣味の店やアウトドア……などが挙がるだろう。

これらの多くは、そもそも居場所となることを企図してつくられたものではない。学校は教育機関、職場は労働を提供して賃金を得る場、駄菓子屋やスナックなどは商売であり、主目的は「誰かの居場所になること」ではない。しかし、人が集まること、人と交わること（あるいは逆に人と交

わらないこと）から、その人にとっては居場所としての機能を果たしている。これらを「結果としての居場所」と呼ぶ。「居場所づくり」などという言葉が叫ばれなかった時代、私

たちは「結果としての居場所」に囲まれていた。

今、「結果としての居場所」は減った。駄菓子屋もスナックも少なくなったし、友だちの家で遊んでそのまま食事するような機会も減った。取って代わって増えた全国チェーンのファミリーレストランやフードコート、居酒屋では、かつてのような居場所感は生まれにくい。だから私たちは今、居場所をつくることを目的とした「居場所づくり」について語るような事態に至っている。

そして「居場所づくり」が行われ、不登校の子が集まるフリースクールが生まれたり、多世代が交流するこども食堂が広がったりしている。しかし、居場所において大切なのは「あなたがそこに居たいと感じるか」だ。「あなた」とは、居場所をつくる人ではない。参加する人だ。参加する人がそこに居たいと感じるかどうかは、参加してみるまでわからない。しかも、日によって、その人のその時の気分によって、変わることがある。



その意味で、居場所とは個人的で、主観的で、暫時的なものだ。それを「あなた（参加者）」ではない第3者（主催者）が、自分ではない誰かのために居場所をつくれるのかといえば、つくるとはできない。これが居場所づくりの不可能性だ。

では、私たちは不可能で無意味なことに取り組もうとしているのか。全国で続々とこども食堂を始めている人たちは、できないことをできるかのように錯覚しているだけなのか。違う。それが居場所づくりの可能性を考えることだ。

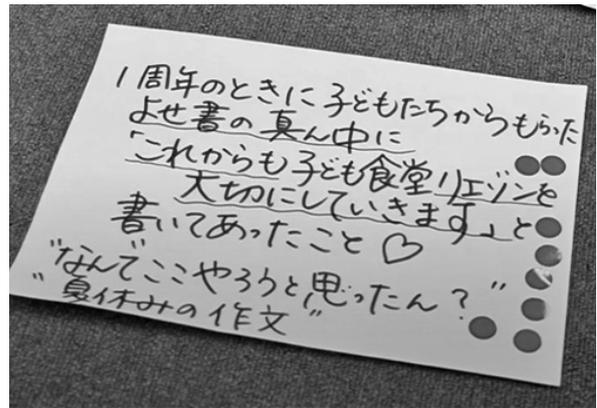
誰かのために居場所をつくることはできないが、「誰かの居場所になってくれたらいいな、と思っただけで場をつくる」ことならできる。ある場所（公民館など）を借り、そこに人々を誘い、来る人を歓待し、参加者がそこを居場所と感じられるように努めることはできる。よって、「居場所づくり」とは「誰かの居場所をつくる行為」ではなく、「誰かの居場所になってくれたらいいなと願って場をつくる行為」のことだ。そこから、居場所に関するいくつかの論理と心理が見えてくる。

多くはプログラムなし

まず、多くの居場所に共通するのは「プログラムがない」という点だ。学校の学習指導要綱、保育園の運営指針に当たるものが居場所にはない。なぜなら、参加者が来てから、その人にとっての居場所になるように運営を組み立てていくので、事前にプログラムが決められていない。

「参加者の意向に沿ってカスタマイズしたい」、平たく言えば「参加者に喜ばれる場所にしたい」という思いが強く、仮に事前のプログラムがある場合でも、参加者に合わせて柔軟に変更することが多い。プログラムに人が合わせるのではなく、人に合わせてプログラムを変えようとする。

居場所におけるコンテンツは重要だが、第一義的なものではない。たとえば、こども食堂は「食」があるから人が集まる。だが、運営者の多くは「うちは食べるだけじゃない」と言う。つまり、食はきっかけで、最も大事なことは参加者が居場所と感じられるような場になることだ。こど



こども食堂運営者が「やっていたよかったと思ったエピソード」として披露してくれた

も食堂の人たちが、自分たちの食堂をどんな場にしたいかを語る場面では、「ほっとできる場にしたい」「気軽に立ち寄れる場にしたい」といった言葉が出てくる。むしろ「食」が出てこないことに驚くだろう。

笑いの中に不安も

自分のつくった場が誰かの居場所になるとは限らないのだから、場を立ち上げる行為は、成功が約束されていない「賭け」に他ならない。しかし、こども食堂の運営者たちは、ベンチャー企業の社長のように「私たちはリスクをとって賭けをしている」とは言わない。代わりに「おせっかいを焼いているだけ」と明るく笑う。

同時に、その笑いの中に不安もある。本当にこの場が誰かの大切な場所になっているのだろうか、との不安だ。みんな楽しく食事して帰っていくのはうれしく、ありがたいことだが、本当にこの場を大切に思ってくれている人はいるだろうか、と考えている。恋をしている若者の気持ち、思春期の子どもを持った親の気持ちになぞらえることができるかもしれない。だから、そのことが確認できるような機会があると、運営者は心から喜ぶ。

写真は、あるこども食堂運営者が「やっていたよかったと思ったエピソード」として披露してくれたものだ。書いたのは小学3年生とのこと。これが泣けるくらいうれしく感じられる背後にある不安に共感できれば、居場所づくりの運営者に寄り添うことができるだろう。 **G**